

えられてきている。しかしながら、1999年以降の状況を考えると、新たな資源管理方策が検討されてもいいのかもかもしれない。

さて、(図-4)に示したように、私たちが産卵場の調査をした、1987年(昭和62年)のシラウオ漁獲量は、わずかに4トン台で、これまでの最低であり、シラウオ漁獲量激減の年であったといえる。

あれだけ精力的な調査をかけたにも拘わらず、産卵場をなかなか特定し得なかったのも、こんなところに原因があったのかも思ったりした。

## 親魚の採捕

産卵場調査の時、底質試料を採取した同じ水域に、刺し網を敷設して、蛸集してくる親魚を採捕した。シラウオの漁獲は、船曳網と刺し網により行われているが、刺し網による漁獲の方が、より一層、産卵場に蛸集する親魚を狙う意味合いが強い。“刺し網の漁場の近辺を探せば、産卵場が見つかるはず”と考え、操業の実態を漁業者に聞き取り、調査海域を、小良ヶ浜と熊川の地先の2箇所に絞込んだ。

そして、卵採集のための採泥と、その地点における親魚の採捕を試みた。採泥は潜水またはドレッジ式採泥器(鉄製円錐形)により、底質の採集を行い、刺し網は2反を1張りとし、1箇所当たり2張り又は1張りを敷設して、2～3時間後に揚網した。親魚の採捕は、1987年2月10日から7月6日までの11回にわたり行った(表-2)。

表-2 産卵場調査における採泥・刺し網調査、試料数一覧(1987年)

月 日	小良ヶ浜			熊川		
	ダイバーによる採泥	採泥器による採泥	刺し網による親魚採捕	ダイバーによる採泥	採泥器による採泥	刺し網による親魚採捕
2月10日	5ヶ所	1ヶ所	1張り	3ヶ所	5ヶ所	—
2月27日	10	8	2	4	5	2張り
3月17日	12	4	2	10	—	3
3月27日	10	3	2	11	1	2
4月13日	10	2	2	11	2	3
4月28日	—	—	—	7	—	3
5月21日	3	—	1	9	—	3
6月6日	12	—	2	—	—	—
6月16日	3	—	2	—	—	—
6月24日	7	—	2	—	—	—
7月6日	—	—	2	—	—	—

この刺し網により、たくさんの親魚を採捕する事が出来た。このころのイシカワシラウオは、二次性徴がはっきりし、雄の尻鰭鱗は、吸着性を持つと共に大きくなり、体型は“ずんぐりむっくり”で、その割に体長はあまり伸びない。これに対し、雌は、見るからに優しい顔つきで、体型もすんなりと細やかで、体長は雄より大きく、腹部の胞卵は外観からもはっきりと、確認し得るようになっていた。

## 全長組成

全長組成では、雌雄による差が認められた。調査期間中(2月～7月)、雄は67～68mmで、殆ど変化はなかったが、雌は、2月上旬に70mmを超え、3月中下旬には73～75mmに達し、その後は変化が少